

『氷室』2022年6月号掲載用

季語つれづれ 番外（二二二） 仲夏 植物

【葵】 立葵 花葵 蜀葵 銭葵

『万葉集』以来、「葵」は立葵のことで、アオイ科の多年草である。観賞用として植えられ高さ二メートルほどになる。六月から七月にかけて、葉腋に短い花柄を持った大きな花をつける。花は下から順に咲く。花弁は五個、花径は一〇センチくらいになる。

立葵の花は六月から咲き始め、四〇日から五〇日ほど咲いているので「梅雨葵」とも呼ばれ、花が終わると梅雨が明けるといふ言い伝えがある。

日差しを求める姿から「仰日（あふひ）」と呼ばれ、「アオイ」に転じた。「会う日」に掛けて万葉集にも歌われた。名前から静岡市と会津若松市の市の花に指定されている。

葵祭の葵、徳川家の「葵の御紋」は「二葉葵」で、初夏、植物の季語であり、ウマノスズクサ科カンアオイ属の多年草である。葵に似た葉を二つつけるのが特徴である。

立葵は薬草として日本に持ち込まれたと言われている。利尿作用があり干した花を煎じて飲んでいた。花や葉を乾燥させて薬とする。喉の腫れや痛みを緩和して炎症を抑える。また下痢止として使われていた。

紅蜀葵、もみぢあふひ、黄蜀葵、とろろあふひも立葵の仲間で大きな花を付ける。

イラクのシャニダール洞窟のネアンデルタール人の埋葬地に、人骨と共に赤いタチアオイが発見された。死者を悼む葬送にこの花が用いられたと考えられている。

『氷室』2022年7月号掲載用

季語つれづれ 番外(一二二) 晩夏 植物

【沙羅の花】 さらの花 夏椿 姫沙羅

ナツツバキ（夏椿、沙羅）はツバキ科ナツツバキ属の落葉高木である。シャラノキ、シャラとも呼ばれる。夏椿の名は花や葉の形が椿に似ていて、花が夏に咲くということが由来である。また、サルナメとも呼ばれるが、成長すると幹肌が次つぎと剥がれて、すべすべしてくるので「サルスベリ」の異名もある。

インド北部のフタバガキ科のサラソウジュ（シャラノキ）に似ているとされ、江戸時代中期、仏教の聖樹である沙羅双樹を夏椿に当てるようになった。シャラは沙羅双樹のサから転じた。しかし私がタイの寺院で見たシャラソウジュの花と木は、まったく異なる姿であり、平家物語の冒頭の「花の色」は、まさしくこれだと思った。

夏椿の原産地は日本から朝鮮半島にかけてで、日本では宮城県、福島県、新潟県以西の本州、四国、九州に自生する。深山の谷間にあり、涼しい場所、湿潤な土地にある。栽培もされていて、北海道南部から九州の範囲で広く植栽可能である。小ぶりのヒメシャラも山地に自生し、栽培もされている。

落葉広葉樹の株立ちで樹皮は滑らかで赤褐色、一〇年目くらいから樹皮が薄く不規則に剥がれ、独特の褐色と灰褐色の斑紋ができる。花期は梅雨期で、朝に開花して夕方に落花する一日花である。京都の妙心寺塔頭である東林院は「沙羅双樹の寺・京都の宿坊」で知られている。

『氷室』2022年7月号掲載用

季語つれづれ 番外(一二三) 晩夏 植物

【瓜】 初瓜 甜瓜 真桑瓜 越瓜 瓜畑

ウリは、狭義にはメロンが東方に伝わってきた品種群の総称であり、広義にはウリ科の果菜類の総称である。ここでは主に狭義のウリのことを述べる。

メロンはインドから北アフリカにかけてが原産地である。果実を食用にするため栽培化され、早くからユーラシア大陸全域に伝播した。日本列島でも貝塚から種子が発掘されている。また、瀬戸内海の島嶼で人里近くで苦味の強い小さな果実をつける野生化した雑草のメロンがある。縄文時代には伝わって栽培されていたと考えられている。

日本で古来「ウリ（フリ）」の名で親しまれ、中国では「瓜」の漢字があてられた。韓国のマクワウリも美味しい。近代、ヨーロッパや西アジアの品種群が伝えられたとき、同じ種であっても在来品種に比べて芳香や甘みが強く、そちらを「メロン」の名で呼ぶようになった。

日本では甘みや清涼感を味わえる「マクワウリ（甜瓜）」などの品種群があるが、キュウリやシロウリのように熟しても甘みの少ない野菜類もできた。また、日本の環境に適合する品種改良が行われた結果、メロンとマクワウリの交配でプリンスメロンなどができた。

中国の西域、新疆ウイグル自治区のオアシス地帯では、古来栽培されてきた品種の「ハミウリ」がとても美味しい。トルファンの葡萄とともに、シルクロードの旅の楽しみの一つである。

『氷室』2022年8月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二四）初秋 植物

【馬鈴薯】 馬鈴薯 ばれいしょ

馬鈴薯は南米高地原産のナス科の一年生作物で、その塊茎が食用になる。

「新馬鈴薯（しんじゃが）」は独特の美味しさで、夏の季語である。

一六世紀末にジャカルタから日本に渡来したので「ジャガラ芋」と呼ばれる。それを略した名が「ジャガ芋」である。また江戸時代後期には、北海道のアイヌもジャガイモを栽培した。寛政年間に探検家の最上徳内がアブタ（現在の洞爺湖町虻田地区）に種芋を持ち込み、地域のアイヌが栽培したのが、北海道でのジャガイモ伝来だと言われる。本格的に導入されたのは明治維新後で、北海道の開拓に利用された。初代根室県令湯地定基により普及し、川田龍吉男爵によって「男爵いも」が定着した。

英語のポテト（potato）の語源は、タイノ族の言葉でサツマイモを意味する *batata* が、スペイン語の *patata* に変化したのが元である。ジャガイモの原産地での言語の一つ、ケチュア語では *papa* とう。

大小多数の塊茎を澱粉の原料や料理に使う。栽培が容易で、救荒食料として広まった。保存がきく野菜として扱われる一方で、主食にもなる食物である。ビタミンCやカリウムなどの豊富な栄養を含むのが特長である。ただし発芽した芽や光に当たって緑色になった皮などには有害物質を含むので、調理の時には取り除くことが必須である。

『氷室』2022年8月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二五） 三秋 植物

【自然薯じねんじょ】 山の芋 山芋

山野に自生するヤマノイモ科の蔓性多年草の根茎が自然薯である。夏に花が咲き、葉腋に零余子を生じる。

自然薯は日本原産で、北海道南西部から本州、四国、九州、沖縄に分布する。国外では台湾および朝鮮半島、中国に分布する。山野の林縁などに自生し、里山の林道沿いや河川沿いの土手に生える。やや湿った土壌を好むが、鬱蒼とした林の中では自生しにくい。条件が合えば公園の植え込みでも育つ。

雌雄異株の多年生つる植物で、茎は淡緑色で他のものに絡み、地上部は一年で枯れる。葉は長卵形から三角状披針形で、基部が凹んだ細長いハート形をしている。

薯蕷（ながいも）は、畑で栽培されたもので、とろろ汁の元である。野山に自生しているものは「自然薯」で、味も粘りも強く、滋養強壮として高価である。根茎の汁が肌につくとかゆみを感じるときがあるが、根茎に含まれるサポニンによって肌が刺激されるためで、アレルギー体質の人は強く感じるときがある。ムチンは、たんぱく質の吸収を促して、血糖値の上昇を抑制し、コレステロールの低下にも効果がある。栄養素としてはビタミンB群、ビタミンC、カリウム、食物繊維を含む。

とろろを麦飯にかけた「麦とろ」が東海道五十三次の鞠子宿（現在の静岡市駿河区丸子）の名物とされた。丁字屋は慶長元（一五九六）年創業である。

『氷室』2022年9月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二六） 晩秋 動物

【秋刀魚】 さいら 初さんま

秋刀魚を古くは「さいら」（佐伊羅魚）と呼んだ。さまな（狭真魚）とか、さんま（青串魚）とも言われた。サンマの学名は「*Cololabis saira*」というが、日本の古称が使われている。「さいら」は紀伊半島での地方名でもある。

夏目漱石は『吾輩は猫である』の中で「三馬」と記した。現代において唯一の漢字表記となっている「秋刀魚」は、一九二二年（大正一〇年）の佐藤春夫の詩『秋刀魚の歌』から広く知られるようになった。

「サンマ」を欧米に紹介したのは、一八五四年に日米和親条約締結のため来日したマシュー・ペリーが連れてきた学術調査団の団員であった。サクラマス、ヤマメ、マアナゴ、イトウなど六二種の日本産の魚を「新種」として紹介し、その中に「サンマ」が含まれていた。

サンマは胃が無く、短く直行する腸が肛門に繋がっている。腸が短いため摂食した餌は、二〇分ほどで消化されて排出される。また、鱗が小さい上にはがれやすい。漁船から水揚げされる際にほとんどの鱗がはがれ落ちてしまう。水揚げのとき剥がれた鱗を多数吞み込んでいる。

秋のサンマは脂肪分が多く独特の風味があり、塩焼きにして、カボス、スダチ、ユズ、レモン、ライムなどの搾り汁やポン酢、醤油などをかけ、さらに大根おろしを添えて食べる。餌を食べてから排出する時間が短いため、内臓が美味しい。

『氷室』2022年9月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二七） 三秋 動物

【鰯】 鰯 真鰯

日本で「イワシ」といえば、ニシン科のマイワシとウルメイワシ、カタクチイワシ科のカタクチイワシ計三種を指す。「潤目鰯」のことは以前に紹介したことがあり、ここでは潤目鰯以外の「鰯」のことを書く。

「鰯」の字は国字であるが、中国でも使用される。中国語では主に「鰵魚」または英語のサーデインを音訳した「沙丁魚」「撒丁魚」などが使われる。ロシア語のイヴァシー（иваси）も日本語に由来する。

諸外国に鰯に相当する言葉は見つからない。英語では、マイワシ類はニシン亜科の数属の小魚と合わせてサーデイン「sardine」と呼ぶ。日本でいう鰯の他にも「ママカリ」などを含んでいる。カタクチイワシ科全体をアンチョビ「anchovy」と呼び、「カタクチイワシ」と訳しているが「エツ」などを含む。ウルメイワシはラウンドヘリング「round herring」と呼ぶ。

海に接するほとんどの地域で食用にされている。日本では、鮮度がよいものが美味で、「七度洗えば鰯の味」と言う。日本近海のマイワシは産卵前に栄養を蓄え脂がのっている六月から七月が旬で、「入梅鰯」と呼ぶ。さしみや寿司など生食の食べ方は外国人が驚く。

DHAやEPAなど、不飽和脂肪酸を豊富に含む。ユビキノンも含まれている。一方、プリン体も多量に含むから、痛の人は、摂取を控えるほうがいいと言われる。

『氷室』2022年10月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二八）三秋 晩秋

【柿】 甘柿 渋柿 富有柿 次郎柿 熟柿 木守柿 柿日和

学術上の植物名はカキノキ（柿の木）で、カキ（柿）は柿の木の果実であるが、一般的に両方を柿と呼ぶ。野生のカキノキは山柿とも呼ばれる。

柿は北海道を除く各地にある。和名「かきのき」の語源は、赤木（あかき）、晁（あかつき）の略語であるという説、あるいは「輝き」の転じた名など諸説ある。中国の揚子江沿岸の原産といわれ、漢名は柿（シ）である。日本国外では、中国の他にも朝鮮半島、済州島に分布する

学名は「ディオスピロス・カキ（*Diospyros kaki*）」で、一七八九年に日本からヨーロッパへ、一八七〇年に北アメリカへと伝わったことから、学名に「*kaki*」が使われた。果実の柿は日本で食用として親しまれた果物として知られており、英語でカキフルーツ（*kaki fruit*）、ドイツ語、フランス語などもカキ「*kaki*」で通る。

英語に柿を表す「パーシモン（*persimmon*）」の語源はアメリカ合衆国東部の先住民の言語、ポウハタン語で「干し果物」を意味する名詞「ペッサミン（*putchamin*, *pasininan*, *pesanin*）」であり、アメリカガキ（*Diospyros virginiana*）の実を干して保存食としていたことによる。

欧米でイスラエル産の柿「シャロン・フルーツ（*sharon fruit*）」が流通しているが、これはシャロン平野に因む名である。

柿のことを書き始めると呼び名だけで終わってしまう。

『氷室』2022年10月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二九）三秋 動物

【鯊】 沙魚 鯊の秋 鯊の潮 鯊日和

「子持鯊」は仲春、動物の季語であり、「鯊釣、鯊舟」が三秋、生活の季語である。また、鯊にはさまざまな呼び名があり、ふるせ、真鯊、黒鯊、赤鯊、虎鯊、飛鯊、ちちぶ、どんこなどの傍題が詠まれることもある。

ハゼは条鰭綱スズキ目ハゼ亜目に分類される魚の総称であり、種類数は現在発見されているものだけで二一〇〇種類を超えろといわれる。未発見、未分類の種もあり、まだまだ増える。サンゴ礁、岩礁海岸、内湾の砂泥底、干潟、汽水域、海と川を回遊するもの、汽水域などごとにさまざまな種類の鯊がいる。

鯊は秋から冬にかけて海に下って産卵する。この頃の鯊が美味で釣の対象とされ、鯊日和の季語になる。繁殖期には雄が巣穴に雌を誘って産卵する。巣穴は自分で作ったり、蝦や蟹の巣穴、空き缶の利用などさまざまである。産卵後は雄が卵を守る。食用になるマハゼなどは釣り、漁業の対象になる。ルアーを含む釣り餌に食欲に喰らいつき、東京湾のような都市部の海岸や海岸近くに浮かべた船からでも手軽に多く釣れるから、鯊釣は人気がある。

多くの種類の鯊が佃煮、唐揚げ、天ぷらなどの食用になり、鯊の焼き干しを正月の伝統的な雑煮の出汁として使う地域があり、高級魚とされている。食用にする場合、鯊類は傷みやすいので、活かして持ち帰るか、氷などで締めて持ち帰らないと生臭い臭いが発生する。

『氷室』2022年11月号掲載用

季語つれづれ 番外（一三〇）初冬 天文

【凧】 木枯

冬の到来を告げる強い北風である。乾いた木の葉を吹き落とし、文字通り木を枯らす風という意味もある。吹き飛ばされた枯葉は風の道筋を追いかけて飛んでいく。

凧という字は古くから使われているが国字である。風の省略形の「几」と「木」を合わせた意味を持たせた会意文字である。

気象庁では、東京における木枯の条件として、期間は一〇月半ばから一一月末までの間に限り、気圧配置が西高東低の冬型となつて季節風が吹くこととしている。東京では風向が西北西ないし北である。また、東京における最大風速が、おおむね風力五、つまり風速毎秒八メートル以上である。大阪における木枯の条件は、期間が霜降から冬至まで、西高東低の冬型の気圧配置、北よりの風、最大風速毎秒八メートル以上である。この条件を満たした風を認定し、最初の木枯を「木枯らし一号」として発表している。これは関東地方（東京）と近畿地方（大阪）だけで発表される。ユーラシア大陸から日本に向かって吹いてくる冬の季節風が日本海を渡る時に水分を含む。それが日本列島中央部の連山で雨や雪を降らせて水分を失い、太平洋側では乾燥した空気となる。

二〇二一年一二月一日には「東京で二年ぶりに木枯らし一号の発表なしというニュースがあった。統計が残る一九五一年以降、七回目だった。

『氷室』2022年11月号掲載用

季語つれづれ 番外（一三一）三冬、生活

【薬喰】 紅葉鍋

寒い時に滋養になる肉類を食べることをいう。かつて獣肉を食べることを嫌う時代があったが、その時にも薬と称して鹿や猪などを食べていた。

最大の鹿肉消費国はドイツで、年間消費量は四万トン以上である。日本では、かつては鹿肉は猪肉と並んで一般に食される貴重な蛋白源であり、代表的な大型獣肉だったが現代での流通や消費は少ない。

猪肉は雌より雄の方が肉が軟らかい。日本では二〇〇二年以降は二〇万頭以上に増加しており、食肉として利用されている。

旧石器時代から現代までを通じて猪は重要な狩猟対象となっている。縄文時代早期の遺跡からも猪が出土する。射殺後速やかに血抜きを行う。清流などで肉を狩猟者が洗う。日本では野生の猪は屠畜場法の対象外であり、ガイドラインや処理マニュアルを制定している自治体も多い。冬季に捕獲した猪肉は柔らかく、夏季の猪肉は硬くて脂肪含有量も低い。冬季の猪肉は高価格である。

猪肉と豚肉とを比較すると、ビタミンB12は、猪肉の方が三倍ほど多い。猪肉の鉄の含有量は豚肉の約四倍である。飽和脂肪酸、不飽和脂肪酸ともに猪肉は牛肩ロース肉と比べて半分ほどである。私が育った高知の中山間地の家では、囲炉裏の鉄鍋に大根と一緒に煮えている光景が忘れられない。薄味の醤油味で煮込むほど柔らかくなる。

『氷室』2022年12月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二二） 晩秋 植物 尾池和夫

【満天星紅葉】

満天星の花、満天星躑躅は晩春の季語で、「どうだん」は灯台の意味である。分枝する形が古い燭台に似ている。若葉とともに長い柄のある壺型の白い鈴蘭のような花がぶら下がる。満天星躑躅はツツジ科の落葉低木で、生け垣に広く栽培されている。葉の広いものはヒロハドウダンツツジと区別される。

大分県上津江村に酒呑童子山があり満天星躑躅の群生地がある。四国内で自生が確認されているのは高知県の一部のみで、広く分布するのはヒロハドウダンツツジとされている。高知県高岡郡日高村の錦山一帯は蛇紋岩地帯である。満天星躑躅は山地の岩場、中でも蛇紋岩が多い場所を好む。その辺りに満天星躑躅が多くみられ、紅葉が山を赤く染める。高知県能津地区は日高村の北側、仁淀川の南側に位置する地区で、元は能津村という独立した村であったが、旧日下村と合併後に日高村となった。旧能津村の集落を合わせて「能津地区」と呼ぶ。清流仁淀川は「水質日本一」の河川に何度も選ばれた。青色で「仁淀ブルー」といわれる。「名越屋沈下橋」も能津地区の名越屋にある。鮎、鰻、川海老が採れる。

錦山もこの地区にある。佐川町出身の牧野富太郎が一九一〇年代になって錦山で初めて自生種を発見した。静岡県島田市の「どうだん原」には八〇〇〇本以上の満天星躑躅が群生しており「市の花」になっている。

『氷室』2022年12月号掲載用

季語つれづれ 番外（一二三） 三秋 動物 尾池和夫

【蓑虫】 鬼の子 蓑虫鳴く

ミノガ科の蛾の幼虫で、木の葉や小枝を糸で綴って巣を作って蓑を纏っているような姿をしている。雄は成虫になると巣を離れ、雌は成虫になっても巣から離れない。

『枕草子』に「みのむしいとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似てこれも恐ろしき心あらむとて、親のあやしき衣ひき着せて「今、秋風吹かむをりぞ来むとする。待てよ」と言ひおきて、逃げて去にけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり」とある。その頃から「鬼の子」と言われていた。「鬼の子」「蓑虫鳴く」の季語はここに由来する。

蓑虫は繊維があれば、葉や枝でなくても蓑を作り上げる。毛糸や細かく切った色紙の中に幼虫を入れると色鮮やかな蓑を作る。蓑虫の糸は蜘蛛の糸よりも強靱であるという研究結果があり、生体工学、バイオミメティクスの分野で応用開発が期待されている。農研機構などでは蓑虫の糸を大量に取り出して工業製品に使う技術を開発したことを二〇一八年に報告した。

雄は雌のフェロモンで飛行して蓑の中の雌と交尾した後死ぬ。雌は蓑の中の蛹の殻の中に一〇〇〇個以上の産卵をして孵化する頃に蓑の下から地上に落下して死ぬ。秋、蓑の前端を細くして小枝などに結わえて越冬し、春に蛹化し、六月から八月に羽化する。

『氷室』2023年1月号掲載用

季語つれづれ 番外（一三四） 晩冬 植物

【海老芋】 京芋

海老芋は反った形と輪になった縞模様が海老に見えるので着いた呼び名である。唐芋（とうのいも）という品種で、土寄せして海老のように曲げて育てるので手間がかかる。海老芋は親芋、子芋、孫芋のすべてが食用となる。海老状になるのは主に子芋の部分である。親芋、子芋、孫芋と増え続けていくので、子孫繁栄の縁起物とされている。

出荷は九月中旬頃から始まり、一月から二月にかけて正月用に需要があるためにピークとなり、三月頃まで続く。旬の時期で晩冬の季語となっている。

京都を中心に古くから作られ、また京料理の食材として用いられてきたことから京芋とも呼ばれ、京都の伝統野菜になっている。安永年間（一七七二から一七八一年）に青蓮院宮が長崎から持ち帰った里芋の種を栽培したのが始まりと伝えられている。棒檣と炊き合わせる京のおばんさい「いもぼう」が有名である。海老芋は肉質のきめが細かく、煮込んでも煮崩れしにくい。

海老芋の生産量は静岡県磐田市周辺がもつとも多い。J A 遠州中央本店の敷地内にある「磐田見付どっさり市」で遠州以外の地域ではめずらしい海老芋を買える。出荷が始まると広大な売り場に海老芋専用コーナーができて、さまざまな大きさの海老芋が種類別に売られている。全国生産量の約八割が磐田市を中心とした地域で作られるが、ほとんどが京都の料亭に送られる。

『氷室』2023年1号掲載用

季語つれづれ 番外（一三五） 晩冬 植物

【人参】 胡蘿蔔

セリ科の根菜で、夏に種を蒔いて秋から冬にかけて収穫する。葉も食用になるが、根は赤く紡錘形で、煮物やカレー、サラダなどに広く利用される。

人参は地中海地域原産である。セリ科の越年草であり、世界中で広く栽培されている。さまざまな品種が作出されており、日本では普通橙色で根系が短いものがよく栽培されているが、金時人参のように真っ赤なものもある。世界的には牛蒡のように長いものや黒紫色など色とりどりの品種がある。

人参はオタネニンジン（朝鮮人参）を指す語で胡蘿蔔（こらふ）と呼ばれた外来野菜であった。「蘿蔔」とは「すずしろ」（ダイコン）のことであり、「胡」は外来であることを示す。胡麻、胡椒、胡桃、胡瓜などの「胡」である。京料理で多く用いる金時人参は「京人参」とも呼ばれ、京野菜の一つに数えられる。栽培しにくいので正月料理用などに市場に出回るが入手が難しい。

熊本長人参は熊本の伝統品種で牛蒡のような細長い根を持つ。縁起物として正月用に出回る。沖縄島人参は沖縄の在来種で黄色で細長い。甘味があり生食、スープ、炒め物、煮物にされる。

人参は蔗糖を多く含み、特有の甘味を持つ。プロビタミンAであるカロテン類が豊富で根菜類では唯一緑黄色野菜に分類されている。

『氷室』2023年2号掲載用

季語つれづれ 番外（一三六） 初春 時候

【うりずん】 おれづみ うりずん南風

沖縄で「若夏」の前に置かれる季語である。沖縄の旧暦二月、三月の頃を指す言葉である。農作物の植え付けにほどよい雨が降るので、大地の豊穡をイメージさせるような語感があるとされる。沖縄にも多くの会員がいる氷室では、新氷室歳時記の時候の季語としている。歳時記によっては仲春から晩春としている場合もある。その頃の沖縄は平均気温が摂氏二〇度前後となり、暑くもなく寒くもない過ごしやすい季節を迎える。一年でもっとも過ごしやすい季節と言われる。

暖かくなってくると同時に、雨で植物が潤う季節を表す言葉であり、語源は「潤い初め」だと言われる。

沖縄は緯度の範囲が広く、島独自の季節の変化がある。うりずんに入る前の一二月から二月初めは沖縄の冬である。気温は低く天気も崩れがちである。そこからだんだん温かくなり、三月に入ると八重山諸島を皮切りに海開きが各地で行われる。服装は薄手の長袖にサンダルなどが適している。日差しが強い日が増えるのでサングラスを持参する。泳ぐには少し水温が低いが、四月に入ると泳げるビーチが増え、ホテルのプールなども営業開始となる。

気持ちの良い晴れの日が多くなり、うりずんの時期を過ぎる五月のゴールデンウィークの頃から沖縄は梅雨に突入する。若夏が初夏の季語である。四月末の穀雨のころから五月はじめにかけての時節で、稲の穂の出るころをいう。

『氷室』2023年2号掲載用

季語つれづれ 番外（一三七） 三春 時候

【日永】 永き日 永日

【遅日】 遅き日 暮遅し 暮れかぬ 夕永し

日永は、春になって昼の時間が伸びて来ることを詠む季語である。時間を計れば実際は夏のほうが春より日が長いのであるが心理的に、日中が短かった冬が終わって急に日が長くなったという実感があることを詠む。

遅日は、春の日の暮れが遅いことの間感を詠む。実際には夏至の頃が日暮れが遅いのであるが、冬の日暮れが早かった記憶の中で、日暮れの遅さがひとしお印象深く感じられることを詠む。

具体的に数字で表すと、京都で二〇二三年一月一日の一日の長さは九時間五〇分五八秒、二月一日の日の長さは一〇時間二八分五九秒でかなり伸びている。日没の時刻は一月一日で一六時五五分四四秒、二月一日では一七時二四分五四秒である。今仕事をしている静岡では、二月一日の日の入りが一七時一六分で、この差は確かに実感がある。

地球が生まれてほぼ同時に月が生まれた。地球と月は姉妹関係にあり、月は地球から次第に遠ざかっている。地球は月の引力の影響を受けていて、月の位置によって満潮と干潮が起こる。この潮汐力で一年に三・八二センチずつ月が地球から離れている。現在は月まで約三八万キロメートルある地球からの距離があるが、例えば、一四億年前には三四万九〇〇キロメートルだった。地球の自転スピードも今より速く、一日は一八・六八時間だった。

『氷室』2023年3号掲載用

季語つれづれ 番外(一三八) 仲春 植物

【土佐水木】 蠟弁花 日向水木

土佐水木は高知県の蛇紋岩地帯のみに自生する日本固有種である。まだ葉の開かない早春、黄色い花が穂状に垂れ下がる。強健で育てやすいため、江戸時代の中期より観賞用に栽培されている。花の少ない時期に咲くことから生け花の花材としてもよく用いられている。

枝を切ると水気の多い樹液が流れ出すことから、あるいは葉の様子が水木に似ることから土佐水木と名付けられた。開花は三月から四月で、葉の展開に先立って咲く。小花は直径七ミリ程度で七から一〇輪が集まって咲き、花の付け根には「苞葉」と呼ばれる檸檬色の膜があるが開花後しばらくすると脱落する。

果実は長さ一センチほどで、表面に星状の毛が密生する。熟すのは一〇月から十一月で、自然に二つに裂け、中から細長い楕円形の黒い種子が二粒ずつ顔を出す。種子は発芽しやすく、蒔けば繁殖できる。

幹は直立するが、細い幹が多数生じて株立ち状になることが多い。また枝は弓なりに育つので雑木の庭や芝庭などで木の合間に植えるといい。

高野水木というのもあるが、土佐水木の花茎は長さ四センチほどで、ここに毛が密生するのが特徴で、この点が異なっている。高野水木は別名に深山土佐水木がある。日向水木は同じマンサク科トサミズキ属の植物で、葉も花も土佐水木より小さく、枝も細い。花が二ないし三個で少ない。

『氷室』2023年3号掲載用

季語つれづれ 番外(一三九) 仲春 植物

【楓の芽】

若楓は以前とりあげた。また秋の紅葉のことも書いた。楓の芽は早春、枝先に紅色のやわらかな新芽を吹く。他の木々に先がけて芽吹くものの一つで、鮮やかな紅の芽がほどこけてゆく様子が印象的である。

最近、若楓の呼び名に「青もみじ」という言葉が目立ってきた。「もみじ」という言葉は、秋に草木が黄色や赤色に変わることの意味する動詞「もみず」に由来し、それが名詞化して「もみじ」となったものである。その後、特に目立って色を変える楓の仲間を「もみじ」と呼ぶようになった。特に葉の分かれ方で「もみじ」と楓と、呼び方を分ける説明まで登場するようになった。そこで紅葉という赤の色と若楓の若緑の色の混同が発生した。紅葉の典型となった楓は、葉の形が蛙の手に似ていることから呼ばれるようになった言葉である。

したがって「青もみじ」という言葉は不自然であるが、すでに『広辞苑』でも採用されており、「まだ紅葉しない楓」と説明されている。広辞苑を一応言葉の採用不採用の基準に使うことは多いのであるが、この場合には賛成できない。という訳で、紅葉、若楓に重ねて、この「楓の芽」をとりあげることにした。

楓の新梢は伸びても最初の節間が短いままなので、盆栽の場合、芽を早々に摘む必要がなく、楓の芽摘みは新梢が少し伸びて葉が固まった頃に行うという特徴がある。

『氷室』2023年4号掲載用

季語つれづれ 番外（一四〇） 晩春 天文

【風炎】 フェーン 風焰

空気が上昇すると気圧が下がって膨張する。そのため気温が下がる。下降すると圧縮され気温が上がる。空気中の水蒸気が凝縮する際に「凝縮熱」が放出される。水蒸気を含む空気の塊が水滴を作りながら上昇する時、一〇〇メートル上昇することに摂氏〇・六五ほど温度が下がる。乾燥した空気の塊が上昇する時、一〇〇メートルで一度下がる。

例えば、二〇〇〇メートルの山の南側で気温が摂氏二〇度の時、湿った空気が山頂に着くと摂氏七度になる。その空気が北側に下りると二七度になる。上昇する時、水蒸気は雨になって山頂では空気は乾いている。日本海側を低気圧や台風が通過すると、日本海側では太平洋側よりも気温が高く乾燥している。この状況をフェーン現象と呼ぶ。

一九五二年四月一七日、鳥取駅前にあった市営動源温泉付近から出火し、折からフェーン現象による最大瞬間風速一五メートルという強い南風が吹き荒れていて、日中の最高気温が二五・三度に達し、湿度は二八パーセントと乾燥していた。火勢は飛躍的に拡大し、付近の商店街や民家に飛び火しながら市街地を北へ扇状に直進した。

フェーン現象の名は、フェーン（ドイツ語で Föhn）というアルプス山中で吹く局地風の呼び名が由来である。アルプスを越えて吹く乾いた暖かい風である。現在では世界各地の同様の風をフェーンと呼ぶ。「風炎」という言葉は、第四代中央気象台長であった岡田武松による。

『氷室』2023年4号掲載用

季語つれづれ 番外（一四一） 晩春 地理

【潮干潟】 潮干 干潟 忘れ潮

旧暦三月初め頃の大潮の時、潮が大きく引いた遠浅の海岸を潮干潟と呼び、潮干狩りを楽しむことができる。かつては全国各地に干潟があつたが、湾岸の埋め立て、大規模な人工構造物の建設などで大きく失われてしまった。潮が引いた後、磯や干潟などに水溜まりができる。それが「潮溜」で、そこに溜まっている海水を「忘れ潮」と言う。海水に小魚や海藻、小さな生き物がいて楽しい。

干潟は時間帯によって陸地と海面下になることを繰り返す地形である。砂浜と比べて波浪の影響が少なく勾配が緩やかである。したがって砂粒が小さく、生物相が多様である平坦地形である。環境省の定義では「干出幅一〇〇メートル以上、干出面積が一ヘクタール以上、移動しやすい基底（砂、礫、砂泥、泥）を満たしたもの」を干潟と呼ぶ。

干潟は内湾の奥や大きな河川の河口域に発達する。日本では九州の有明海周辺に大規模なものがある。その干出面積は二〇七・三ヘクタール（一九九〇年）である。

干潟は以前、世界各地で干拓や埋め立てが行われた。しかし生物群の多様性、渡り鳥の中継地、潮汐作用や生物群による水質浄化作用、沿岸のマングローブ林による津波災害の軽減など、多様な意義が理解され、保護する機運が高まっている。日本の主な干潟三七か所のうち、ラムサール条約登録湿地である谷津干潟や漫湖干潟などが恒久的に保全されることとなっている。

『氷室』2023年5号掲載用

季語つれづれ 番外(一四二) 晩春 植物

【桜】 牧野富太郎と稚木桜

今回はワカキノサクラ(稚木桜)のことである。NHKの連続テレビ小説第一〇八作『らんまん』のモデルは、日本の植物学の父と言われている牧野富太郎(まきの・とみたろう、一八六二―一九五七)である。草花と向き合う植物学者の物語がフィクションとして描かれる。

上村登著『牧野富太郎伝 花と恋して』によると、「博士が東京へ出て間もないころ、東京でソメイヨシノを初めて見、そのころはまだ故郷には一本もなかったその苗木を買い郷里へ送って植えさせた」とあるから、一九〇二年頃の日本の桜事情がわかる

牧野富太郎が故郷の高知県佐川町で栽培されていた植物に命名した「ワカキノサクラ」は、種を蒔いてから三年という短期間で花が咲く。

二〇〇八年一月一五日、アメリカ合衆国のNASAからスペースシャトルエンデバー号で、若田光一さんと桜が宇宙へ出発した。約八か月半旅した桜は「宇宙桜」と呼ばれている。その中に稚木桜がある。佐川町の尾川小中学校の小学生が種を取り、有人宇宙システム株式会社を通してNASAに送られて宇宙を旅して、地球に帰った。その桜の種から二〇一〇年に八本が発芽し、二〇一一年に花が咲いた。一緒に宇宙に行ったいくつかの桜の中で、一番早く花が咲いた。その種から二世が生まれ、さらに三世の稚木桜を、今生徒たちが大切に育てている。

『氷室』2023年5号掲載用

季語つれづれ 番外（一四三） 晩春 植物

【杉の花】 杉花粉

杉は風によって花粉を運ぶ植物、すなわち風媒花である。花粉の飛散時期は、地域によって前後するが主に二月から四月にかけてである。

杉花粉の大きさは三〇マイクロメートル、円形で先端にパピラと呼ばれる突起がある。水を含むと花粉は膨張して外壁が割れ、内容物は分解して放出される。

杉花粉を放出する雄花は、七月頃から形成され始め、一月頃には雄花の中の花粉が成熟し、その後、気温の低下や昼の時間が短くなることにより雄花は休眠状態に入る。冬の寒さに一定期間さらされることで覚醒し、花粉の飛散に向けた準備が始まる。花粉の飛散開始時期は、覚醒した後に暖かい日が続くとき早まり、寒い日が続くとき遅くなる。

杉花粉の生産量は、花粉が形成される前年の夏、日射量が多く降水量が少ないほど、翌春の花粉生産量が多くなる傾向がある。杉の雄花生産量が少ない年の翌年は、雄花生産量が増加する傾向が見られる。

日本の森林面積の約一八パーセントに当たる約四四八万ヘクタールが杉の人工林で、多くが植えられてから三〇年以上となっている。日本では一九六〇年頃から杉花粉症が急増した。北海道や沖縄では杉花粉が少なく、花粉症の時期を過ごす観光案がある。二〇〇五年に十勝支庁管内の上士幌町が避花粉地として名乗りをあげ、二〇〇六年には奄美群島も療養や保養目的の花粉症患者の誘致を始めた。

『氷室』2023年6号掲載用

季語つれづれ 番外（一四四） 三春 植物

【蒲公英】 鼓草 蒲公英の絮

冬蒲公英という三冬の植物の季語もある。蒲公英の種類は多くて日本国内で二〇種以上ある。大きく分けて在来種の日本蒲公英と外来種の西洋蒲公英がある。後者はヨーロッパ原産である。花の下総苞片で見分けることができる。日本蒲公英の総苞片は反り返えらず、西洋蒲公英のは反り返っている。

日本蒲公英は春になると一度だけ咲く。西洋蒲公英は強くて開花時期が三月から一〇月に及び、しかも繰り返し何度も咲く。冬でも咲いていることがあり、荒地や道路、住宅地のような乾いた土壌を好んで生息する。この強さゆえ、外来性タンポポ种群は環境省「生態系被害防止外来種リスト」などに入った。ただ、両者の好む環境が異なるために、うまく住み分けされている。

蒲公英の花のつくりは進化していて、植物進化の系統で頂点に立つグループの一つである。種類を問わず花は朝に開いて夕方に閉じる。雨がなければ三日連続して規則正しく開閉する。舌状花と呼ばれる小さな花が円盤状に集まったり、頭花が一つの花であるように見える。舌状花の一つに五つの花びらを付け、合着して合弁花冠となる。舌状花の中央部に雌蕊が伸び、雄蕊が計五本合着している。花が終わると花茎が一旦倒れ、数日後に再び立ち上がる。花のときよりも高く伸びて、冠毛の付く種子を作り、湿度が低いときに綿毛を球状に展開して風に乗る。